

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0990200040		
法人名	特定非営利活動法人 醍醐会		
事業所名	醍醐の森川崎グループホーム		
所在地	栃木県足利市川崎町2316番地		
自己評価作成日	令和3年9月10日	評価結果市町村受理日	令和3年11月12日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/09/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人栃木県社会福祉協議会		
所在地	栃木県宇都宮市若草1-10-6		
訪問調査日	令和3年9月29日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当ホームは認知症高齢者に対して家族や地域への理解を深めるために積極的に夏祭りや家族会、クリスマス会等のイベントを企画して毎年実行してきました。しかしながら、新型コロナウイルスの流行により世界が一変し、全ての参加企画を中止することを決断。「地域に根ざした開かれた施設」の継続は困難であった。そんな危機的状況の中で何ができるのか模索し、第一は利用者様と職員も心身の健康と安全の確保、感染症対策の徹底であった。その為、利用者様と職員のみでイベントを行い、ご家族には窓越し面会や電話、写真、報告書を通じて様子が分かるように努めている。回覧板や一部地域の方々との交流は続けている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「温かい家庭的な雰囲気を大切に、一人一人の尊厳を守り、地域に根ざし自立した生活・楽しくゆつくりと安全な生活を送る」という理念に見るように、事業所が個々の利用者にとっての「我が家」となることができるよう職員一同が支援に携わっている。「一日に一回は利用者に笑顔になっていただきたい」との思いで、利用者一人ひとりに丁寧な声掛けを心掛けているとともに、利用者の趣味嗜好を知る機会を積極的に設け、把握した内容をもとに個々人に合わせた「個別ケア」を行っている。さらには、家族と利用者との絆、家族の思いに寄り添い、家族との丁寧な意見交換を行いながら、利用者本位の暮らしの実現を図っている。また、自治会の地域住民らとも互いに協力し合える良好な関係を築くことができるよう意識し、地域とのつながりを保っている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー) です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎月、管理者、職員が参加して行われる定例会議や分科会議に於いて、コロナ禍における地域との関わり、地域に貢献できる施設の運営を目指して、その事業理念を共有している。	家庭的な環境の中で個人の尊厳を守りながら一人ひとりに合わせた生活の実現、さらには地域に根ざした事業所であることを追求し、それらが表れた理念を大切にしている。日に一度行われるカンファレンスを通して、「利用者にとって何が最善か」を考える際は、理念に立ち返り、管理者、職員が常に共有し、支援を行っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会費を納入し、回覧板を受け取り、届ける等、職員と入居者様と一緒にいき、積極的に町内会のイベントを通して地域の一員として自覚が持てるように支援している。	利用者が縁台でお茶のみをするなどして、近隣住民と互いに声を掛け合う関係を築いている。町内会や近くの学童保育、寺などつながりを持ち、消毒液や食品を分け合うなど、積極的に交流している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	当ホームで開催される夏祭り、クリスマス会等のイベントへの参加要請等によって認知症への理解を促進するばかりでなく、積極的に町内会活動に参加する度に認知症の理解と施設の関わり方の説明の機会を得ていたが、コロナ禍ではイベント開催や参加が難しく、参加回数が減っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議員に日常も含めて積極的に当ホームで開催されるイベント等に参加して頂き、運営推進会議時に当ホームの外部評価等を公開し、それについて改善点がないか積極的に吸い上げるようにしている。コロナ禍の今はイベント等の参加はできない状況が続いている為、会議に参加できない事情も加味し、電話会議等を利用して意見の吸い上げを行っている。	事業所のイベント開催に合わせて会議を設定している。コロナ禍の事情も考慮し、参加しやすいよう電話会議も取り入れている。家族代表意見として、コロナ禍での面会希望があった際は、感染対策を講じて窓越しの面会を行うなど希望を実現し、サービスが向上するよう努めている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	当ホームの運営推進会議の委員である職員、行政関係者と共に「協働」を礎に信頼関係を築くことができるようになった。	市の担当者がイベントと同時開催の運営推進会議に出席し、事業所の状況を把握している。災害対応の備えとして、有事の際に速やかな情報共有と連携を図れるよう、日頃から意識して密なやり取りを行っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎日一回行われるカンファレンスに職員、管理者が参加し、定例会議に於いても、身体拘束の定義や事例を挙げて話し合いの機会を設けてメディスンロック防止等についても取り組んでいる。研修資料を基に密にならないようにスキルアップに繋げている。	事業所における具体的事例を題材に実践に活かせるよう内部研修を実施している。さらに当該研修を繰り返し行うことで、職員の一層の技能向上につなげている。認知症の方への支援が題材となっている資料を全職員で共有することにより、高い意識づけのきっかけづくりにも努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	カンファレンスにおいて「栃木県高齢者虐待防止対策マニュアル」を中心に勉強会を開催し、その予防に努め、事業所以外でも虐待があった場合の通報義務等についても討議、検討を重ねている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	日常生活自立支援事業を利用している利用者様がいる為、十分に理解しているが、管理者と職員が参加するカンファレンスルームや定例会議に於いてその必要性がある対象者の有無等について検討している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	当ホームへの入居契約締結時可能な限り、管理者、計画担当責任者又は、それに準ずる職員が担当し、詳細に至るまで説明し、理解、納得を図り改定があった場合には当ホームで組織されている家族会の総会等で説明し、新たな契約締結を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議員に日常も含めて積極的に当ホームで開催されるイベント等に参加して頂き、運営推進会議時に当ホームの外部評価等を公開し、それについて改善点がないか積極的に吸い上げるようにしている。コロナ禍の今はイベント等の参加はできない状況が続いている為、会議に参加できない事情も加味し、電話会議等を利用して意見の吸い上げを行っている。	利用者・利用者家族が意見を表せるよう、信頼関係を築くことを大切にしている。家族に運営推進会議の際や介護計画の見直し時に意見を聞いている。毎月送付している報告書について意見を得ることもあり、丁寧な対応とより良い支援への反映に努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	定例会議やカンファレンスにて運営や各々の入居者様の情報の共有、それに対する介護、それに対応する為の用具、器具等の購入、使用方法までの検討をしている。	日々のカンファレンス等以外でも職員が管理者に対して意見や提案ができる関係性が築かれている。管理者は、職員の意見を否定することなく、一旦受け止め、提案の根拠等を見極め、話し合い、必要に応じて運営に活かしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者は法人の理事会等に於いて各事業給与水準等の意見を吸い上げており、定例会議に於いても職員が要望する介護し易くする為の福祉用具等の充実を図り、管理者と職員の距離を近くして職場環境整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	管理者は、個々の職員の介護能力を把握しており、資料配布し、勉強会の機会を作っている。カンファレンスや会議の場でフィードバックさせている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	当ホームは、栃木県グループホーム協会、あしかが介護支援専門員協会等に所属し、職員をそこで開催される研修会等に積極的に参加させ、他の事業所との交流を図り、その良い点を取りいれている。現在はリモートの研修も増えたことから、現地に赴くことはなるべく控えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	併設する認知症専用デイサービスセンターを利用されていた利用者様が入居する場合も多く、既に信頼関係、安全確保が構築されている。担当者が日常的に談話する時間があり、個別に対応している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	現在の生活状況や不安なことを十分時間をかけて聞き取り、要望に添えるようにしている。安心して利用開始に繋げられるよう努力を惜まず信頼関係に努めている。そして希望に沿った支援に繋げ、安心して暮らせるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	当ホームでは、グループ関連事業所に居宅介護支援事業所を併設していない。従って、「抱え込み」は行っていない。市民に支援される施設を目指し、介護保険制度の説明を懇切丁寧に説明している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者が楽しく暮らすことを基本に考え調理関係、環境整備などを一緒に行っている。自室の掃除はできる範囲でお願いし、皆さんと気持ちよく過ごせるようにしている。時には昔の料理を教えて頂き参考にすることもある。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族会を組織し、家族への各種イベントの積極的な参加を促し、職員と共に入居者を支えていくことを認識して頂けるようにしている。現在は各種イベントは中止となっているが、平屋である特性を活かして窓越し面会でいつでも顔の見える環境にし、共にコロナ禍を乗り越えようという関係が築かれている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居者本人が「ここが私の住まいです」という認識を持って頂けるように、ご家族を含め、ご家族の了承を得て、親戚やご友人等の面会を積極的に受け入れている。また、ドライブの際に各々の入居者様の馴染みの場所を訪れるようにしている。	コロナ禍で家族等の面会が困難な中でも、これまで慣れ親しんだ店や場所などを訪れ、車の窓越しであっても利用者が目にできる機会を設けている。馴染みの場所を把握するために以前利用者が居住していた地域等をドライブするなど、利用者一人ひとりを尊重した支援を心掛けている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	当ホーム内で入居者が孤立しないように洗濯物たたみは毎夕の入居者様同士が協力して行い作業とし、散歩等で他の入居者の車椅子を押してもらおう等、相互関係を構築できるように支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	重篤になり、入院した場合、退去を余儀なくされた入居者は、退院後、同グループ事業所の看護小規模多機能施設に繋げるか、同施設内の宿泊事業にて支援するようにしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	常に声かけを行い「どうしたいのか?」「どう暮らしたいのか?」等を入居者本人に確認して、それを家族に伝え、要望を叶えるようにしているが、困難な場合には代替え等を考えて支援している。	毎朝、利用者に「どんな風に過ごしたいか」といった声掛けをしている。「駄菓子屋さんごっこ」などを企画し、利用者の趣向を確認する工夫をしている。ある利用者が食べたいものを希望した際は、利用者全員で楽しめるような機会としたり、家族との面会を希望した際は、テレビ電話をしたりと、本人の思いを汲んだ柔軟な支援に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメントの時期には、基本に立ち返り、再確認している。「現在の暮らしに適しているのか?」等をサービス利用計画書等の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	各々の入居者のその日のバイタルチェックや睡眠状況で心身状態を把握し、一日の過ごし方を決定するが、入居者様本人の要望も大切にしよう支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期的カンファレンスを行い、計画に沿った支援は出来ているかを振り返り、計画変更時には数回のモニタリングを調理、デイ看護師等を含めた職員全員で行い、計画については本人とご家族の意向を最優先し、担当職員を中心に職員全員によって支援内容を決定し、作成されている。また、定例会議に於いても検討の機会を得ている。	介護計画の見直し時に家族と面談し、意見をj得ている。居室担当の職員からの提案を聞き取り、それぞれの意見等を計画に反映させている。定例会議やカンファレンスでは計画を職員間で共有している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日、ケース記録を残し、アセスメントの参考にしてている。また、変化に対しては細かく記録し、職員全員が把握できるようにしている。そして、次の計画に反映している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	常に入居者様本人に適したサービスを提供できるよう、入居前のケアマネジャーに相談やご家族に注意事項を伺い、場合によっては当事業所の隣にある認知症専用デイサービスセンターと宿泊事業で柔軟に対応すると共に隣接する同グループ事業所の運営する看護小規模多機能施設と連携して支援できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	買い物、外食等で入居者と職員と一緒に出掛ける際は出先に連絡を入れたり、事前に訪問したりして認知症について説明して理解を求め、協働し、入居者様が安心して利用できるようにしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	当法人の委託医に隔週で訪問診療してもらう為、各々の入居者の状況を的確に伝え、状況が変化し、検討の時期に入った場合は、ご家族等を交えて納得がいく診察ができるように支援している。些細な変化でも委託医に連絡し、他の診察時にも経過記録を作成し、ご家族と情報共有ができています。	委託医による診察は、利用者の状態に合わせ、安定している利用者は月に1回とするなど利用者に負担がかからないように行っている。職員による通院介助の際は、家族にも同席してもらい、情報共有が適切にできるように心掛けている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	同法人の認知症専用デイサービスセンター看護師と情報を共有し、些細な変化も見落とさないように適切な受診に繋げられるようにしている。更に、当法人の委託医の看護師とも同様に情報共有して支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	協力支援病院と協力契約を締結し、入院元を入院や訪問へ行った際には、先方の医療機関関係者と情報交換を密にし、できるだけ早期に「住み慣れた家」に戻れるように努めている。退院後の通院には、その入居者の状況を書面に添えて受診できるようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	大きな変化があり、改善の見込みがないと委託医が判断した場合、ご家族に直接説明してもらい、当ホームの可能な介護範囲を納得いくまで説明し、その方針を決定し、それをそのご家族、委託医、職員と共に共有し、支援している。	病状の進行状況から急変が予測される場合や看取りが必要な時期にある利用者家族に対しては、委託医から説明するとともに事業所における看取りの対応内容について丁寧に説明をしている。場合によっては、隣接する関連施設の医療的ケアを提案し、本人と家族の安心に寄り添えるよう委託医、職員らで支援に取り組んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	毎月、管理者、全ての職員が参加して行う定例会議に於いても、当法人の認知症専用デイサービスセンターの看護師職員の応援を受けて応急処置や急変時の指導や訓練を適時行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防訓練、避難訓練は年に二回行われている。職員が一人になった場合を想定して訓練を行っている。再三再四、オール電化の施設にするよう行政から勧められたが太陽光発電と自家用発電機、ガス等にリスク分散した為、震災時に耐えられる施設となっている。	地震があった際は、ドアを開ける、しゃがむといった動作を職員がとっさに取れるよう日頃から心掛けている。職員の喫煙場所を一か所にする他、動力源を複数にするため、発電機を設置したり、関連施設等の貯水タンクや避難先を確保したりと防災対策を講じている。	事業所として取り組んでいる災害対策について運営推進会議で情報共有を図ることで、地域の協力的体制づくりのきっかけとすることや、日常支援の中に訓練の要素を取り入れるなど、更なる意識付けを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	毎月、管理者、全ての職員が参加して行なわれる定例会議を開催し、画一的な介護にせず、常に個別ケアを意識の中におき、一人一人の人格を尊重しながら、且つ、プライバシーを守りながら、優しい対応を心がけている。	レクリエーションを行う際は、利用者一人ひとりの様子を確認し、それぞれの過ごし方を優先している。それまで生きてきた利用者の生活スタイルを重視し、丁寧な声掛けを行うとともに、個別ケアに重きをおいた支援を行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	毎月、管理者、全ての職員が参加して行われる定例会議において常日頃から優しい対応で信頼関係を築きながら、各々の入居者様本人の思いを知り、自由に自己表現できるように支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員本位の介護ではなく、入居者本人の心地の良い場所の提供やその雰囲気優先し、「今日は何がしたのか」を伺い、その希望に沿って支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	普段から入居者本人の要望に沿った身なりを整えるようにし、特に外出する際には女性はお化粧や日焼け止めを塗る、特にお気に入りの服に着替える、男性も同様に念入りに髭を剃るなど、身なりを整えるようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	旬の野菜をご近所から頂くことも多く、彩りや盛り付けに工夫し、健康面を考えながら、できるだけ薄味で食事の提供を行っている。配膳は難しいこともあるが下膳など片付けに関しては所定の場所まで持ち運びできる入居者にはお願いしている。	以前管理栄養士が作成した献立を基本に、旬の食材や近所の方からの戴き物を活かしたメニューを加えている。季節の野菜を使ったレクリエーションとしてぬか漬けを行い、利用者の力を活かせるような工夫をしている。配膳には、季節を感じられる飾りを添え、細やかな気配りをしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	献立は、管理栄養士が作ったものを使用。食材や一日の栄養バランスが把握できるようになっている。特にカルシウムや鉄分の補給ができるように心がけている。水分補給は、経口補水液を作り、摂取しやすいように努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食前に誤嚥防止の口腔体操を行っている。毎食後口腔ケアを行い、毎晩ポリデント消毒を行っている。歯磨きは本人に任せているが、認知症進行により困難な場合には職員が最終的に確認を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	出来るだけ日中はトイレ使用を支援し、オムツやパットの使用を減らすようにしている。認知症の進行により排泄機能が低下している入居者に関して排泄パターンを知り、誘導し、排泄の失敗防止に努めている。	一人ひとりに合わせた声掛けをし、日中、夜間ともに基本的にトイレを使用した排せつ支援を行っている。場合によっては、リハビリパンツやパットを使用するが、その際は、利用者や家族に丁寧に説明し、本人の自尊心への配慮をしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	元気アップ体操や屋外の広大な敷地を散歩することによる運動を行い、水分摂取量の確認や食物繊維の多く含む食材、ヨーグルト等を摂取するように心がけ、職員がそうした取り組みができるようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	希望があれば毎日、入浴可能な体制になっており、入浴時間は昼食後から夕方にかけて時間帯で支援しているが、ADLが低下した場合、認知症専用デイサービスセンターのリフト浴を利用して入浴支援を行っている。	2日に1回、午前中に入浴支援を行っている。失禁等で汚れが気になる利用者には、適時の入浴で清潔を保ったり、入浴を拒否する利用者には、丁寧な声掛けをしたりと、個々に沿った支援をしている。時期によっては手浴・足浴を取り入れている。入浴中にも水分補給をすることで、血圧の急上昇や脱水症状の予防に努めている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	介護入カソフトを活用し、睡眠状況の確認し日中は心地の良い疲労感が得られるような活動を提供することによって安眠に繋げている。但し、普段より疲労感が見られる場合は休息を促すようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員全員は、常に各々の入居者様の疾病とその症状を把握し、処方箋を確認できるようにしている。入居者様の薬の副作用や効果を記録し、委託医の診察の際はその症状や変化を伝え、経過観察を記録して支援している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	9人のグループを家族として捉え、様々な役割を担うことで張りのある暮らしができるように支援している。自由時間には、楽しむこと、やりたいことで過ごせるように配慮し、ドライブ等で気分転換させるように退屈しない過ごし方を心掛けている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	当法人の組織する家族会に協力してもらい、年二回近隣市町村への小旅行に出かけている他、ショッピングモール等に出掛けて外食も楽しんできた。現在は外出は控えている為、中止している。	コロナ禍のため小旅行等の外出は控えているものの、利用者の馴染みの場所へのドライブは継続しており、人気がなく自然を感じられる場所では、窓を開け、外の空気に触れられる機会を作っている。事業所の回廊を散歩したり、敷地にある自動販売機で買い物をするなど、積極的に戸外へ出ることで、運動機能の維持や利用者の認知機能の確認をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お店に出向いての買い物は制限している為、施設前にある自販機にご本人でお金を投入してもらい、購入したいジュースを自ら選んで購入ボタンを押して購入している。お金を投入する際の金額もご本人に考えて頂き、支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があれば、電話も利用できるようにしており、お手紙等も同様にハガキ、便箋もいつでも利用することができる。希望があればいつでも家族やご友人等と連絡可能な状態にしてある。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有空間の温度、湿度は常に適温適湿に保つように配慮し、自室、トイレや調理湿等が分かりやすいように表示してある。季節が感じられるような楽しい掲示物を一緒に作成している。また、庭に咲く花を屋内に飾り、その空間作りをしている。	共用空間は、広々として明るく、利用者はいくつか設置されたソファに思い思いに座ってゆったり過ごすことができる。季節を感じられる装飾を利用者と作成し、丁寧に飾り付けて楽しめるよう支援している。中庭で利用者と一緒にひまわりを種から育てるなどして、植物の成長を通した楽しみを利用者間で共有し、季節感を得るとともに、家庭的で居心地の良い空間を作るよう工夫している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	椅子等をホールだけでなく廊下や玄関にも配置し、どの場所でも自分の時間を過ごせるようにしたり、気の合ったご入居様同士で過ごせるようにしたり、また、自室に招き入れ、ゆっくりと過ごせるように配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室内の配慮は、入居者様とご家族、職員で相談して決定している。自宅にいるような雰囲気を感じられるように、入居前まで使用していた家具を持ち込み、自分の生活スタイルを維持し、心地良い環境を整えている。	先の水害で被災したことをきっかけに、それまで畳敷きと板の間であった居室は全室フローリングとした。床の形態は変わっても、利用者の入居前からの生活様式やこだわりを尊重し、思い思いに自由に使用できるよう支援している。空調についても快適に過ごせるよう職員が目配りし、サポートしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	共用の場所には、絵や大きな文字で入居者様の目的が分かるようになっている。入居者様が入居前の自宅のトイレの位置によって入居する部屋を決めることもあり、安全かつ、出来るだけ自立した生活が送れるように努めている。		